急性腎盂腎炎 （金沢医療センター：小児科）

北國新聞
2007年（平成19年）8月19日（日曜日） 社会2 （36）

丈夫がいいね ■338

第7部 子ども健康学

急性腎盂腎炎

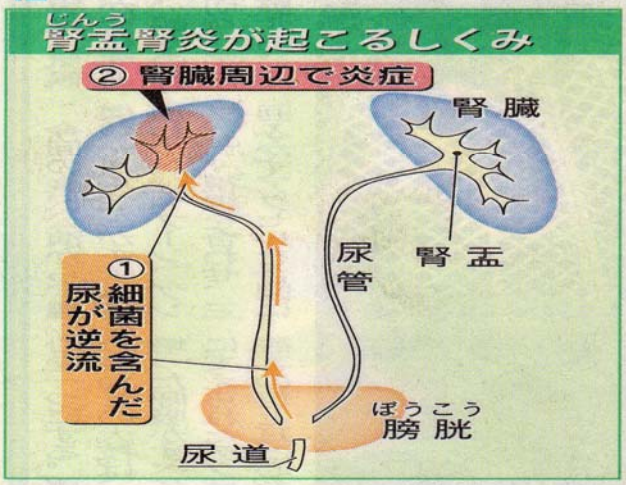
熱が続いたら尿検査を

金沢医療センター（金沢市）の太田和秀小児科医長は、乳幼児や小学生によくみられる急性腎盂腎炎の早期発見に力を入れている。発見が遅れると取り返しのつかない事態を招きかねないからである。

風邪と混同

急性腎盂腎炎は、尿道から入った細菌が腎臓周辺にまで到達し、炎症を起こす病気である。発熱以外に目立った症状はなく、風邪と見分けがつけにくい。このため見過ごされることが多く、放置すれば腎不全に移行し、人工透析を余儀なくされる恐れのある病気だ。

三九度前後の熱が出た金沢市内の生後六カ月の男児も、当初は自宅近くの病院で風邪と診断された。咳や鼻水は全く出ず、処方された薬を飲むと熱はすぐに下がった。しかし、その後、再び発熱し、薬を飲むと治まるという状態を繰り返し、心配した親が金沢医療センターに連れていった。



急性腎盂腎炎を疑った太田医長が検査したところ、案の定、尿から大腸菌が検出された。大腸菌を含んだ尿が膀胱から尿管を通って右側の腎臓へと逆流し、炎症を起こしていたのだ。

なぜ尿が逆流するのだろう。太田医長によると、尿管と膀胱の接続部には、膀胱内にたまった尿が逆流するのを防ぐ弁のような機能が備わっている。ところが出生児十人のうち一人の割合で、この弁がうまく機能しない子がいる。すると尿の逆流を招き、急性腎盂腎炎を患うことになる。弁の機能は成長するにつれて大半が改善するが、治らないケースもある。改善が見込まれない場合は、尿の逆流を防ぐ手術が必要になる。

急性腎盂腎炎は本来、発熱のほか、腰や背中の痛みなどの自覚症状を伴う。しかし、乳幼児の場合、体の不調をうまく伝えられず、親はもちろん、診察する医師も、熱があって何となく機嫌が悪いとしか思わず、急性腎盂腎炎であることを見過ごす場合がある。

「熱だけ」に注意

時には下痢や嘔吐などの症状が出るケースもあるが、この時は胃腸の病気だと思い込み、さらに判断が遅れがちになる。だから太田医長は、診察に訪れた親が「咳や鼻水は出ないが、発熱だけは何度も繰り返す」と訴えた場合は必ず急性腎盂腎炎を疑い、検尿を行うようにしている。

「急性腎盂腎炎の子どもは年々増えていますが、それは今まで医師が気付かなかっただけかもしれません」と太田医長は自戒を込めて話す。親も急性腎盂腎炎の知識をぜひ持ちたい。